

史 跡 解 説

曾羽城跡

日本の城は、長い歴史のなかで時代ごとに変化してきました。各時代を代表するものを挙げますと、 古代においては、集落同士の抗争から住民を守るために築かれた弥生時代の環濠集落(例えば唐古・鍵遺跡)、 大陸からの侵攻に備えるために築かれた飛鳥時代の朝鮮式山城(例えば高安城)、 律令国家の首都として築かれた飛鳥時代末から平安時代の都城(藤原京、平城京)、 在地領主(武士)同士の抗争に使用するためと在地領主の居館として築かれた中世(鎌倉・室町時代)の山城と居館(例えば貝吹山城・越智居館)、 近世大名が居城として防備と藩政のために築かれた近世城郭(大阪城・近世高取城)と、城を築く目的が時代と共に移り変わりました。

中世の高取町には、貝吹山城、越智居館、曾羽城、佐田城、城の口城、壺阪城、高取城、観覚寺城、松山城、丹生谷城がありました。それぞれ貝吹山城(越智氏)の支城です。曾羽城は、高取町大字市尾に所在する貝吹山城(越智氏)の支城の一つです。領主は米田隠岐守です。周囲を堀と石垣で囲まれた本格的な中世の山城でした。

斎明天皇陵

斎明天皇陵は、高取町大字車木(くるまき)の民家のうしろにある丘陵の山頂にあります。大田皇女(ひめみこ)の弟で、八歳で亡くなった饗唾の建王(たけるのみこ)と間人皇女(はしひと)も合葬されています。中腹の茂みに大田皇女の墓があります。大田皇女は息子の天智天皇の娘で、後に天武天皇に嫁しました。

斎明天皇は、舒明天皇(じょめい)の皇后で夫君の崩御後、皇極天皇(こうぎょく)となり、645年大化改新とともに位を弟の軽皇子孝徳天皇に譲り、孝徳天皇崩御後には、重祚(ちょうそ)して斎明天皇となりました。

皇極天皇時には、息子の中大兄皇子が大化改新を行うため、蘇我入鹿(いるか)を自分の目の前で誅するのを目撃し、また斎明天皇時には孝徳天皇の息子の有間皇子(ありま)が謀反の疑いで中大兄皇子に謀殺される惨劇を見なければなりませんでした。しかし、中大兄皇子が行う大化改新の行政改革は思うようには進展をせず、また対外関係では新羅(しらぎ)と戦う百済(くだら)への救援と内憂外患を背負っている息子の中大兄皇子を助けるため、「**狂心たがれこころの渠みぞ**」と言われる亀形石造物などの溝を築造し、

酒船石をも取り入れた丘陵全体を何重もの石垣を囲んで、国家の存栄を祈念する祭祀の場を作って民衆の動揺を抑えました。また、息子の要請により天皇自身も百済救援の兵を派遣するため九州筑前朝倉宮に出征されましたが、その地で急死されました。古代飛鳥時代に律令国家建設に向け大化改新で行政の大改革を成し遂げた中大兄皇子(天智天皇)と、その跡をついで強力な中央集権国家を築いた大海人皇子(天武天皇)、孝徳天皇の皇后である間人皇女(はしひと)の母親でもあります。

今は、この越智の岡で深い眠りにっていますが、現在の混迷する政治・経済・社会情勢をどのように見ているのでしょうか・・・。

光雲寺

山号寺号は、越智山光雲寺で、宗派は禅宗の黄檗宗(おうばくしゅう)です。本尊は釈迦如来で、脇侍(わきじ)は向かって右にお釈迦様の理性と慈悲深い心を表し、人々の幸せをいつも願っておられる普賢菩薩と、左にお釈迦様の知恵を表している文殊菩薩とで釈迦三尊を構成していて、それぞれ木彫坐像です。

当寺は、南北朝時代初期の1346年に、出家した越智邦澄が自家の菩提寺として禅宗の寺を建立して、興雲寺と称したのが、始まりです。以後越智氏の菩提寺として栄えました。

平安時代に大和守に任ぜられた源頼親が高市郡の開拓を進め、一族が定着していき、大和源氏と称されるようになりました。その庶流である高取町を本拠地とする越智氏は、中世大和武士のうち、もっとも武家として由緒正しく、その活躍は目ざましく、大和中世史は越智氏と郡山を本拠地とする筒井氏の抗争に終始しました。南北朝時代は後醍醐天皇の南朝の忠臣として活躍し、室町時代の応仁の乱では西軍に組し活躍しました。

越智氏が1583年郡山の筒井氏に敗れ浄土宗の寺院として余命を保っていました。1680年頃に黄檗宗にとなって興雲寺の興を光に改め、1689年今井町細井戸多衛門の志により、本堂・庫裏が建立され、五代目覚林和尚が山門・両壁を造立し、ほぼ現在にいたっています。本堂は県の重要文化財に指定されています。1640年高取藩に植村氏が入部して以来光雲寺を帰依所とするに至り、高取藩士20余氏の墓地ともなっています。

光雲寺の山門の前に伝説に彩られた「厄除け杉」の大木が光雲寺の幾星霜を見守り凜として聳え立っています。この杉にまつわる伝説は多くありますが、その一つは、

1582年織田信長の命を受けた筒井順慶に攻められた越智氏の家臣、鳥屋陣羽守の息子二人がこの杉に登って難を逃れた。その時二人の息子は42歳と25歳の厄年だったことから、厄除け杉と呼ばれるようになりました。

在南神社（有南神社）

光雲寺の東に位置する、越智家累代の氏神。

建久八年(1197)に没した、親家を有南岡に葬り、越智一族の米田監俊武が「有南ノ廟三社郎ヲ立て太郎親家ヲ有南ノ神ト崇メ当家ノ守護神」としたと「越智氏家系図」に記されている。

天津岩戸別神社

明治8年以前は「九頭竜明神」と言われていた。越智氏が、元暦2年の平家覆滅の後、高取の居住地である越智郷に凱旋した際に、戦場守護の神として九頭明神を崇拜したという記述が、「越智氏家系図」に記されている。

越智氏居館跡（オヤシキ跡）

北は貝吹山を主峯とする丘陵で南と東もまた丘陵に囲まれ、西は曾我川を隔て丘陵があり、周囲を丘陵に取り囲まれた地点に越智氏居館があります。

居館の前には土塁や堀もあったと思われます。その左右に一族・家臣の屋敷や寺々がならんでいました。この地をいまに字「オヤシキ」と呼ばれています。

貝吹山城跡

貝吹山城は貝吹山の山頂 210mに築かれた中世の山城です。築城は14世紀南北朝時代とされています。貝吹山城の名前の由来は、城に事あるときは、三尺五寸のほら貝を吹き鳴らしたことからきています。

現在は、南北の方向の頂部の曲輪(くるわ)と崩壊した石垣しか確認できませんが、主郭を中心に四方の尾根上に諸郭が設けられていて、連郭を成していました。貝吹山城は越智氏の平時の居館(越智城)との二つの総称で「越智本城」といわれていました。

この城は当初、越智城の詰城として矢倉台ぐらいの設備であったのが、天嶮の要害として次第に貝吹山城になっていきました。元々は敵が来ないか見張りをするためのものでしたが、戦になると越智氏は居城を出てこの城に立て籠もりました。やがてこの城は本城となり、詰城として高取城が建てられました。

毎年、7月14日山上の御神体にお神酒を供えるささやか

な祭が催されています。

乾城古墳

貝吹山の南の山麓に所在する飛鳥時代の初期に築かれた古墳です。一辺が3 5m、高さ約11mの方墳で南側に開口している大型の横穴式石室をもつ古墳です。

玄室の左右の壁は下から上に緩い角度で内側に傾斜していて、前後の壁はかなり急激に内側にせり出すように積んであり、下から見上げると天井石がかなり小さく見え、ドーム状の玄室になっています。玄室の高さは5.1mと石舞台の4.8mより高く県内では一番高い玄室の古墳です。被葬者は渡来系有力氏族と考えられています。

鳥ヶ峰古戦場

1863年8月13日(明治維新の5年前) 孝明天皇が大和国畝傍山陵に詣で、陵前で攘夷断行の勅命を幕府にくだすため、天皇みずから大和行幸を宣言されました。天皇の大和行幸の露払いとしてまた討幕軍の先鋒になろうと、行幸宣言の翌日公家中山侍従忠光を大将にいただいて、吉村寅太郎、松本奎堂、藤本鉄石を副総裁にして「天誅組」を旗揚げしました。8月17日に倒幕の狼煙を上げるため幕府の五條代官所を襲撃し、櫻井寺に幕府に支配されない日本初の政府である五條御政府を樹立しました。

しかし、翌18日に薩摩・会津の公武合体派の謀議により政変が起こり、三条実美ら尊皇攘夷の公卿19人が即時参内停止になり、有名な「七卿都落ち」が起こります。大和行幸は中止になり一転天誅組は賊軍として追討軍に追われることになりました。

天誅組は尊王の志が厚い十津川で兵を募り、難攻不落の「高取城」を攻め取り、ここから天下の尊皇攘夷の志士たちに倒幕の号令を挙げるため、26日に高取城への攻撃が開始されました。高取の鳥ヶ峰で火蓋は切られましたが、大阪冬の陣・夏の陣で活躍した攻城砲が天誅組に火を噴き、火力で劣る天誅組は敗退しました。そして、圧倒的な追討軍との死闘をくりかえしながら、東吉野村で最後の死闘を繰り広げました。

たかとり観光ボランティアガイドの会 Web サイト

http://www.takatori-guide.net/

高取町の歴史散歩

http://www4.kcn.ne.jp/~yukiharu/